

智頭町スタディツアー レポート

テーマ：大麻草栽培農家の上野俊彦さんからみる智頭町行政のあり方

東京大学公共政策大学院修士 1年

真鍋 弘毅

1. 上野俊彦さんの話を聞いて

智頭町の大麻草栽培農家である上野俊彦さんの話を聞いて印象に残ったことがある。

それは、上野さんが智頭町へ移住してきた経緯についてである。福島原発事故による放射線物質増加の影響で、彼とその家族が、居住していた群馬県からの移住先として智頭町を選んだ理由が、「森のようちえん」の存在なのである。

通常、移住者は移住先で仕事ができるかどうかを中心に考えるはずであると考えていた私は、仕事ではなく、子供の育つ環境を視野にいれて移住先を決めた上野さんの決断に非常に驚いた(上野さんが農家であったことも一つの要因としては考えられるが)。

この話を聞いて、地方に移住者を増やしていくアプローチとして、単なる働き口だけでなく、子供や高齢者が生活する環境が整っているかをより重視する家庭が存在しており、その数は将来的に増えていくのではないかと考えるに至った。

2. 長期的な視点をもった自治体のアプローチ

自治体は、たしかに商品券やゆるキャラなどを使った、観光政策に重点を置いたまちづくりのアプローチを進めることも重要であるが、今後を見据えて、社会保障や居住環境を整えるなどのより長期的な視点から見たまちづくりを志向していく必要があると考える。

その意味で、智頭町が進めている自然を生かしたまちづくりは、自然の中で子供が成長し、高齢者が快適に暮らしていく環境整備を重視する、より長期的なアプローチである。

そのアプローチの一つである「もりのようちえん」は、たしかに直接的・経済的には補助金に対する大きな効果を生んでいないかもしれないが、その存在が上野さんのような移住者を増やし、雇用を創出することで町を活性化しているのである。

3. 住民の意見を拾い上げるリーダーの存在

上野さんの居住、ひいては大麻農家としての活躍を担保したのが、自治体である智頭町や鳥取県の行政処理能力の高さである。上野さんは、大麻草栽培の申請にあたって、まず智頭町長に許可をもらい、その後、町長の力も借りながら鳥取県知事の認可までこぎつけたというが、異例ともいえる大麻草の栽培に対して、全国に先立って許可を出したリーダー達の決断にただ感服するばかりである。

町長を中心とした智頭町行政は、住民一人一人が考えている意見や抱いている熱い思い

を受け入れる。それだけでなく、それによって生じる責任を担保する。このような環境は、住民に更なるアイデアや意欲を創出し、好循環を生み出す大きな要因となる。今回は尋ねることができなかったが、上野さんの事例以外にも様々な事例を見る限り、県知事を中心とした鳥取県行政についても、同じことが言えるであろう。

このように、智頭町から鳥取県まで、常に風通しの良い環境が作られることによって、智頭町という小さな自治体に住む1人の考えや個性を、県という大きな自治体、ひいては日本全国にまで反映させることが可能となる。

風通しの良い行政組織を作っていくことが、まちづくりに関わるこれからのリーダーに求められる素質である。リーダーは、自らの考えを上から住民に押し付けるのではなく、ビジョンは描きながらも、下から湧き上がる住民のアイデアや個性を拾い上げ、それを政策として反映させていく力が必要なのである。

上野さんの話を伺う中で、以上に挙げたような、行政に必要とされるこれからの行政政策のあり方や行政組織のあり方が、自然と浮かんできた。やはり現場の力は大きい。